

## 第41回地域政策研究セミナー

## パネルディスカッション

## 「地域資源のを見つけ方と活かし方」

(平成30年度「地域活動ステップアップ大作戦」)

|          |                         |        |
|----------|-------------------------|--------|
| コメンテーター  | 建築家／伊東豊雄建築設計事務所 代表      | 伊東 豊雄氏 |
| パネリスト    | 株式会社コトヴィア 代表取締役         | 荻原 実紀氏 |
|          | 株式会社大三島みんなのワイナリー 運営事務局長 | 川田 佑輔氏 |
|          | NPO法人農音 代表理事            | 田中 佑樹氏 |
| コーディネーター | 愛媛大学 社会共創学部 特任講師        | 笠松 浩樹氏 |

## ◆地域資源をもとにした活動◆



笠松 浩樹 氏

笠松：それでは、ディスカッションを始めさせていただきます。本日の伊東さんの講演で、私は非常に心に残る言葉がありました。「地域資源のを見つけ方と活かし方は、簡単・効率ではない。」というところです。恐らく本日のパネリストの3名の方もそういう感覚を持って地域で活躍されていると思います。

パネリストの皆さまは、大三島、中島、宇和島から来られた、島つながりの方々です。それでは、進めていきます。

早速ですが、川田さんから自己紹介と活動の紹介をいただければと思います。お願いします。

川田：私は大三島から来ました、川田佑輔と申します。出身は、静岡県のお茶が有名な牧之原市です。生まれは1985年です。私が一番初めにワインに出会ったきっかけは、東京の大学に在学中、伊東さんの奥様が立ち上げられました国際親善のNPOに参加し、伊東さんの奥様

からワインについて教えてもらううちにワイン好きになり、伊東さんのワイナリープロジェクトの活動に関わらせていただきました。

ワインが好きになったことから、自分でワインを造りたいと思いました。当時、伊東さんが、瀬戸内の大三島で活動していることを聞き、将来その島でワインを造ったら、すごくいいものができるのではないかとということで、そのワイナリープロジェクトに賛同し、2015年に大三島に移住をしました。今は、株式会社大三島みんなのワイナリーでブドウ栽培と醸造に携わらせていただいています。

これまでの大三島みんなのワイナリーの取組みについて、ご紹介させていただきます。私たちは大三島でワインを造るために、大三島初となるワイン用ブドウの栽培と醸造をしています。

大三島はもともと柑橘が非常に有名な島だったのですが、現在は高齢化が進み、柑橘の耕作放棄地がとて多くなっている現状があります。そのような中で、島で柑



川田 佑輔 氏

橘に代わる新しい特産品が何かないかということで、私たちがこの耕作放棄地を開墾しブドウ栽培を始め、ワインを醸造しました。

2017年に収穫したもので醸造し、2018年の明けに少しだけワインができました。その他にもワイン造りにご協力いただける島の農家さんに、委託栽培をお願いして少しずつですが島の中でブドウ栽培、ワイン造りの輪を広げています。夜は、大山祇神社の参道の元国有施設をリノベーションし、島内外からいろいろな方々に来ていただき、みんなでワインバルをして、みんなの思いがこもったワインが造れるよう頑張っているところです。

もう一つご紹介させていただきます。苗木のオーナー制度をやっています。苗木のオーナーになっていただくと、2020年から5年間いただいた口数分だけワインにしてお返しする活動もしています。

笠松：ありがとうございました。続きまして田中さんお願いします。



田中 佑樹 氏

田中：初めまして、田中佑樹と申します。私は、松山市沖の中島という島に移住して地域活性のNPOをやっています。地域活性と言いましても、多分に漏れず過疎高齢化が激しい島ですので、活動の中心は移住促進です。もともと中島は柑橘一筋でやってきた島ですので、観光や移住の誘致については積極的な活動がされていなかった島です。

私は松山市出身で、しばらく大学のため上京し、愛媛に戻ってくるタイミングで育った松山市内から外れた所に帰ってきたのでJターンになります。

私が中島に移住し、一人での田舎暮らしは嫌だと思っ

て、友達を呼び込むような感覚で移住促進を行った結果、活動開始から6年か7年ぐらい経つのですが、56人の移住者を呼び込むことに成功しました。少しずつですが島の一番欠けていた年齢層である30代、40代が増加している段階です。

私は島で柑橘栽培をしながら主に柑橘販売を行っています。最近ではお金には全然なっていないのですが、イノシシ駆除も行っています。島内ではジビエ料理として普通に食べるようになっていますが、まだ、ジビエの産業を始めていない中島において、カスタマイズして何か事業化できないか検討中です。よろしくお願いします。

荻松：ありがとうございます。それでは続いて荻原さんよろしいですか。



荻原 実紀 氏

荻原：皆さま、こんにちは。株式会社コトヴィアの荻原と申します。私は宇和島市の出身で、現在東京で会社を設立し、「Emotional Design Power for People」という理念で、人々の心に響く感性価値のデザインを大切にしながらお仕事をさせていただいています。

先程からワインや柑橘、イノシシなどのキーワードが出てきていますが、私の実家も宇和島の中でも山手の方でしたので、鹿やイノシシやサルがそばにいるような環境で、私の父も水産業を行い、隣近所の住民の方々も米や野菜や果物を栽培し、子供の頃から地域資源が自然にそばにあった暮らしをしてきました。私は「感性」というキーワードで仕事をしていますが、豊かな自然によって感性が育まれたと感じている次第です。

私が大学院時代に、企業にデザインの思考を取り込んで企業経営を活性化していくという仕事、長く「日本

型 CI」という理論を確立してきた PAOS 代表の中西元男氏に会い、その独自のノウハウや実績に感銘を受け、インターンシップを経て、そのまま PAOS に就職しました。その後、PAOS で一緒に働いていたデザイナーやプランナーと独立し、2010年の4月に、株式会社コトヴィアという会社を設立しました。

愛媛の事例を少しご紹介させていただきたいと思います。県内の某農業生産法人の事例として、法人の立ち上げ時の創業理念の明文化や CI、商品開発に伴うパッケージデザインなどに関わらせていただいています。蜜柑を塩漬けにして熟成させた調味料の「塩みかん」という商品は、ANA のファーストクラスで採用され、最近ではグローバル GAP、日本の JGAP など簡単に取得できるようなシステムを開発され、地元金融機関主催の「ビジネスプランコンテスト」で最優秀賞を受賞されたりなど、先進的な考えの強い方に出会って私どもにとってもやりがいのある面白いプロジェクトをさせていただいています。

また、某信用金庫さんは90周年を間近にひかえ、地元に着目した信用金庫として宇和島市民の方々に親しみを持ってもらいたいという思いから、CI プロジェクトをさせていただきました。2015年に宇和島伊達400年祭という、地域中心となったイベントがあり、地域に根差した金融機関として、一過性ではなく形に残るものとして、どのような文化事業ができるだろうかという企画にも関わらせていただき、地元の歴史を分かりやすく子供たちに伝える絵本として「伊達秀宗公物語」を製作しました。この絵本は大人気となり、その後「伊達宗紀公物語」、「豊姫物語」と3冊続いて製作しました。

笠松：ありがとうございました。宇和島生まれ、宇和島育ちで、今は外から宇和島を見るような立場でしょうか。一度離れてみての印象がありましたら教えてください。

荻原：私はすごく東京に憧れを持って出て行きました。就職先のオフィスも表参道にあり、PAOS 代表の中西様から、入社当時に「街を歩く、それが一番の証人であり、参考になる。」と教えを受け、すすんで足を運びいろいろなヒントを得ることを経験しました。

PAOS に就職して、その次の年に伊東豊雄先生が設計されたトッズ表参道ビルが完成し非常に衝撃を受けま

した。櫺の木の美しい表参道に非常にマッチした建物で、中に入っても柱と壁がどこにあるのか分からないような構造。また陳列されているイタリア製のバッグや靴が本当に美しく見え、さらに街と一緒に溶け込んだ建物なのです。以来、街や社会との共生を考えた仕事をしたいと思っています。

今は1～2カ月に1回、宇和島に帰郷するようになり、宇和島の人たちに受け入れてもらうように心掛けて、仕事をさせていただいています。

笠松：どうもありがとうございます。

伊東さん、表参道の話がありましたが、先程20世紀の近代思想は技術で自然を克服するともありました。今の3人のお話を聞かれて感想やコメントがありましたらお願いします。



伊東 豊雄 氏

伊東：お三方三様に地方に根付いて活躍をされていることが、やはりすごいと思いましたが、そしてまた荻原さんが言われたように、一度は東京に行ってみたくても、昔ほど東京は面白いところではないのではないかと、若い人が思うようになってきている気がします。

内閣府が2～3年前に調査したものと、東京に住んでいる人の4割は、「もし可能だったら地方へ行って住みたい。」と思っているそうです。仕事や子育てや住む場所などが保証されれば、もっと急激に地方に行く人が増えるのではないかと思います。特に20代の方は、半数がそう思っているらしいです。そういうことを、先駆的に体现されているので大変感心しました。

川田さんはビデオインタビューの中で、柑橘畑を開墾してブドウ畑に変えていくときに「そこで柑橘を栽培していた人、あるいはその柑橘の前に畑をやっていた人の



DNAが残っている。だから、畑ごとにやはり違うブドウができるのです。」と言っています。私は気が付かなかったことです。やはり自分の手で畑を開墾することによってこのような実感が湧くのだと、すごくいいことを言っていると思いました。その川田くんが作るブドウが次の世代の人にDNAとして受け継がれ、田舎でも歴史が継承されていくことが素晴らしいと思いました。

川田さんが今、一番苦勞しているのはどういうことですか。

川田：もう全体的に苦勞です。先程伊東さんが言われていた、歴史を継承するという意味ではないですけども、耕作放棄地だったとはいえ誰かが育てていた土地をお借りして、そこにブドウを植えていくわけです。日々の作業において、この先をどう継承していくかがすごく苦勞といたしますか、考えさせられるところではあります。現在は私がやっているとしても、例えば10年後、20年後に向かってどうしていきたいのか、どうしていくのかを、日々の作業の中でそれを実際に行動する、考えていくことが苦勞として一番自分の中で大きいところではあります。私たちに続いてブドウ栽培やワインの醸造が、ここの大三島をはじめとした瀬戸内の地域で広がっていったら、すごくうれしいと思います。

伊東：ありがとうございます。

田中さんは、56人もの移住者を呼んでこられたというので驚いたのですが、中島の人口はどのぐらいの島ですか。

田中：かつて10,000人いた人口も今は2,500人まで減っています。毎年不思議なくらいぴたり100人ずつ人口が減っているのです。私たちが数年かけて50人程の人を呼び込んでも、はっきり言って焼け石に水です。

伊東：でもそれはすごいことだと思います。2,500人の島で50人程の移住者がいるのですから。バンドをされて、そういう関係の移住者が結構いるのですか。

田中：そうです。この「農音」と銘打って「音」を少し強調しているのは、音楽をやっていたバンドマンたちが、

音楽で食べていく感じではなく、ふらふら生きているタイプの人間を呼び込もうと思ったのです。というのも、私自身がそうだったのもあります。当時、田舎への移住で最もネックと言われていたのは年収の減少です。やはり残念ながら農業は低所得なのです。けれど都市部にも低所得な人たちがいるではないですか。ワーキングプアと呼ばれる人たちもそうですし、フリーター生活をしている人たちです。年収600万円が200万円になると少し二の足を踏みますが、200万円が200万円になって環境が良くなるといったら魅力でしょう。そこの層を狙ったのです。

伊東：なるほど。では、農業をしながらバンドをする人が結構多いのですか。

田中：そうです。当初のコンセプトとしては「バンドマン」の呼び込みだったのですが、結果、3人目の移住者は音楽をやらない人が来てしまいましたので、これはもうコンセプトが崩れたと思い、そこから先は「表現者」とコンセプトを切り替えて、ダンスをする人やガラス細工をする人などいろいろなタイプの移住者が来ています。

伊東：楽しそうな島ですね。

田中：東京は確かに悪くないのです。けれど田舎に行くと、少し違うタイプの楽しみもあり、違う楽しさがあることを分かっていたらしくて、とにかく私たちの移住促進の特徴は、東京をネガティブに捉えるのではなく、島も楽しいという楽しさの発信に尽きます。

伊東：なるほど。この「東京、多分楽しかったと思う。」というキャッチコピーは面白いです。柑橘を収穫しながら歌を歌っているような感じで、いかにも田中さんの気持ちといえますか、生き方がここに表れているように感じます。

それから、荻原さんが先程 PAOS の中西さんのお話をされていたのですが、実は中西さんとは私も親しくて、私が80年代ぐらいのまだほとんど仕事がない時に、企業のデザインを総合的に全部変えていくと、その中でお店などのインテリアも変えたり、お店の建築を造ったり

という仕事をさせていただきました。

私も東京で伊東建築塾という私塾を主宰していて、島に来ていると時々、島の企業や住人の方から「何かロゴマークを作って」と言われたり「Corporate Identity」のようなことをやってほしいと依頼されるのですが、そのような人たちは、私達はボランティアでやってくれると思っているのです。「あいつらに頼んだら、何かをやってくれる。」といった雰囲気が定着しつつあって、そのようなところが結構大変なのでしょうけれど、荻原さんは宇和島での仕事はどのような状況ですか。

荻原：非常にポイントを突かれたご質問をいただいたと思っています。

やはりひと昔前は、日本の経済成長とともにCIの分野があったと思うのです。ロゴマークは、マーケティングツールとして経済を支えるものの役割としてのデザインだったと思うのですが、某信用金庫さんの事例を見ていくとCI、いわゆるデザインだけではなく、理念や行動指針を作成したり、このプロジェクトを通じて地域に根づく信用金庫として、どう地方にあるべきかなどと一緒に検討したりしています。

東京の仕事では、今までやってきていたようなCIプロジェクトの仕事は時々あるのですが、地方に行くとそれだけではなく、周辺でいろいろお手伝いをしないと解決できないことがたくさんあるように思っています。また、愛媛県内の事例では、今治市であれば伊東先生であったり、佐藤可士和さんにタオルブランドをご依頼されたりといった、いわゆる東京で活躍されている専門家の方に、きちんとした仕事としてご依頼できる成功体験を何度か積まれているのが素晴らしいと思います。私どもの地元では、専門家に対してお仕事をご一緒する経験値が少ないため、私という存在が仲介することで、時にそういった専門家の方々とお仕事をご一緒できるような土壌づくりや人脈づくりのようなものができればいいと思いながらお仕事をさせていただいています。

伊東：ありがとうございます。

#### ◆地域資源とは？◆

笠松：会場の皆さまからたくさんのご質問をいただきま

した。代表的なものや幾つか重複しているものがありますので、それに従って皆さまに聞いてみたいと思います。

それでは、伊東さんよろしいでしょうか。行政との付き合い方や民間から資金を得ることについて、また、ここは皆さまにも関係するかもしれませんが、地域振興策や行政施策に対して、どのようなものにリクエストがあるかとの質問です。お願いします。

伊東：先程荻原さんが「今治は、佐藤可士和さんや私のような」と言われましたけれど、私は勝手に来ているだけなのです。今治市から「来てくれ。」と言われて来たわけではありませんし、それほど優遇されているとも思いません。

ただ行政には大三島に「今治市伊東豊雄建築ミュージアム」を造っていただきました。なぜ、私が来たこともない島でミュージアムを造っていただいたかということ、今の建築ミュージアムの隣に、所さんという実業家が造られた「ところミュージアム大三島」という建物があります。最初は所さんから「ところミュージアム大三島」の横にもう一つ自分のミュージアムを造りたいと設計を依頼されたのです。所さんとやりとりしている時に私が「私は結構いい歳だし、若い人を育てるようなことをこれからの仕事としてやっていきたいのです。」と言ったら、「ここでやったらいいではないか。」と仰ったのです。「ところミュージアムのアネックス」を貸していただけるのだとありがたく思っていたら「おまえのミュージアムでいい。」と続けられたのです。今治市議会でそのことをオーソライズしていただき、今の建築ミュージアムとなりました。そのミュージアムを運営していくために、毎年展示の企画費などの資金は、ある程度助成していただくのですが、それ以外島に対して何かをしてくださっている訳ではありません。もう少し支援下さってほしいと思いますが、市政としてやりにくいこともあるのだらうと思うのです。

今、どのような活動を行っているかといいますと、東京にある建築塾は、会員の方に毎年1万円を払っていただき、また30万円単位で企業の方に寄付をいただいて、そのお金で活動が成り立っています。その資金の一部で島の活動を賄っている状況ですので結構厳しいです。ワイナリーなども今はまだ利益が出ていません。川田さん

が話していたように苗木オーナーというシステムで前借りしているような状況です。来年、再来年ぐらいからはワインをお返ししていかなければいけませんし、厳しい状況です。ただ東京にいる塾生の人たちも、島に来ると本当に楽しいようです。最初塾生だった人も移住してくれていますし、その他にも移住してくてくれた塾生の方が、農業をやったりしています。そういう人もいますのでやはり東京にはない魅力があると思います。物質的な豊かさとは違う、精神的な豊かさを頼りにしてやっているということでしょうか。

笠松：ありがとうございます。次に、建築のお話が幾つか出ていました。地方の建築家の地域社会における役割とその可能性、そこから転じて空き家の話も少しあるのですけれども、空き家改修のその先は一体どういうものがあるかについてもご意見をいただければと思います。

伊東：大三島だけでも800軒の空き家があります。私達はその対策を何とかしたいと思っています。設計を仕事にしている若い人の大半は、地方で空き家の改修、あるいは住宅の設計ぐらいしか仕事がないと思っているのです。今、重要なことは、20世紀型の近代主義、技術によって自然を克服できるという思想に基づいた建築がもう行き詰まっているのです。今も東京でたくさん高層ビルが建てられていますが、私はそれらが20世紀型の延長で経済のためだけに造られていて、今後、人口が減ったときにどうなるのだろうと思っているのです。経済によって回った歯車を止められないから造っているに過ぎないのではないか、オリンピックを過ぎたら東京は仕事も極端に減るらしいですし、大阪は「万博をやって」と言っていますが、もっと自然に開いた建築や人と人とを結ぶような建築をこれから我々は考えなくてはいけないと思います。そういう時こそ、空き家のような改修で考えてきたことが逆に生きる、高層建築をやるよりもそれは次世代へつながっていく、建築の一番根元を考えているようなことだと私は思っているのです。そこで充足しないで、次にそれを新しい建築にどう置き換えていけるのか常に考えてほしい。またそういう目を持ってほしいです。

そうした地盤としてこの瀬戸内は気候もいいですし、

それほど大きな都市でもなく非常に住みやすいので、こういうところこそ可能性があると期待したいです。

笠松：そこが先程おっしゃった、人と自然の関係回復につながってくるのですね。そして今のお話から少し広げて移住者としての視点で聞いてみたいのですが、川田さん、田中さんに特にお答えいただければと思います。移住先として選ばれた理由についてお願いします。

川田：私の場合は伊東さんと知り合いだったため、伊東さんが関わっている大三島に行ってみました。大三島はすごく海が近く非常に静かで穏やかな所だったので、ここだったらおいしいブドウができるのではないかと思います。実際に大三島に移住してみると、生活するのに心地よい部分と街の大きさが丁度よかったのです。住みやすさといったら少し不便なところもありますが、暮らしやすさでいったら、自然も豊かでおいしいものもたくさんあり、東京や山梨よりすごくいい所です。住んでいるうちに大三島での暮らしのビジョンが、自分の中で少しずつ出来上がってきたのです。

笠松：その時に地元の人にきちんと馴染めましたか。

川田：そこに生活し、結婚して、子供も生まれ、少しでもその土地の一部になれたと思っています。地元の方々にもすごく迎えていただいていますし、良くしていただいています。私としては馴染めているのではないかと常々思っています。

笠松：地元の方を積極的に巻き込んでいく必要があるのかどうか、または、地元の人、暮らす人が、自ら動くことについてはいかがでしょうか。

川田：積極的に巻き込んでいく部分に関しましては、無理やりに巻き込むことはないと思うのですが、ただ、外部から来て右も左も分からない状態ですので、一番初めに頼りにするのは、やはり地元の方々なのです。今もブドウを栽培していて困ったことがあったら、近所の農家さんにアドバイスをいただいています。

地元の方々も私たちの活動に興味を持っていただき、

「うちもブドウを栽培しようか。」と声を上げていただいたり、逆に私らも柑橘栽培をお手伝いしたりしています。そのような関係の中で、少しずつお互いに動いていく関わり方が、私たちがやってきた方法でした。

笠松：一方的に何かというわけではなく、お互いに持ちつ持たれつのような関係ですね。

川田：そうです。

伊東：私から見ていると、IターンやUターンでやってきた若い人は、何かイベントをやるなどというところごく積極的に参加してくれます。

けれど昔から住んでいるお年寄りも、もう自分たちはいい、十分幸せだからこれ以上何もなくてもいいという方は結構多いのです。何をやっても、全然出てきてくたさらない方も多いのです。ただ若い人たちはどんどん島外に出ていって、先程の田中さんの島と同様に大三島も人口は減っています。もう半分以上が65歳以上の高齢者ですから、限界集落に近づいているのです。それほどたくさん観光客に来てもらったら困るけれども、やはりもう少し若い人で活気づいて、いろいろな活動があるような島にしていきたいと思います。大三島ではパンを作る若い人が現れたり、地ビールを造る人が現れたり、少しずつ元気が出てきています、そのうちにお年寄りも何か変わってきたと感じ、きっと出てきてくれるのではないかという期待があります。

笠松：大三島の場合、どれぐらいの移住者がいらっやいますか。

川田：私が知っている範囲で十数人います。特にここ最近なのですが、かなり多くなってきていると思います。

伊東：それで、先程「10年ぶりに子供が生まれた。」と言っていました。

川田：確実に1人は生まれています。

伊東：他にも何人か生まれています。移住してきた人同

士で結構、結婚しているので、島の人口は若い人たちが少しずつ増えています。

笠松：いい話です。

先程少し空き家の話も出ていましたが、特にお2人の場合は定住をされていますが、住居はどうされていますか。ではまず、続けて川田さんからよろしいですか。

川田：最初は市営住宅があったのでそちらで住みながら、島内で住める場所を探していました。畑の近くの古民家が空いたのでそちらに移住し、今は結婚して子供も生まれましたので新しい家に引っ越しました。

笠松：田中さんはいかがですか。移住をした選択と家の関係で何かありますか。

田中：移住をした選択については、田舎だったらどこでも良かったのですが、ふらっと遊びに行った中島のビーチがすごくきれいだったのです。私は東京に住んでいた時には、時々江の島などに行って人で埋め尽くされているビーチを見慣れていたので、ビーチが貸し切りのような穴場があるのだと思って、こういう所は住むにも穴場なのだろうと思い、それで中島にしました。

家も賃貸ですがすぐ見つかりました。移住者の傾向で言いますと、やはり家はほぼ賃貸です。逆に空き家の大家さんは、早く売り払いたいので売り家です出しますが、移住希望で来る人たちは、まず賃貸で暮らしたいという意見の方が多いようです。

笠松：先程も川田さんにお伺いしたことで、地元の人との関係や地元の人を巻き込んでいくことについてはいかがでしょうか。

田中：私はそこまで人に対しておこがましく動けないタイプですので、あまり影響を与えようとは思わないですが、地元の人に馴染むことはすごく必要だと思っています。

島外から入ってきて「自分のやり方はこうですから。」と言ってしまうと、それこそ、伊東さんもおっしゃられたとおり、勝手に私たちは来ている立場ですので、悪く



言えばウイルスのようなものです。いつの間にか入って  
いって増えていっているような。ですから、なるべく悪  
玉菌にならないように自粛するようにしています。

笠松：「島を活性化させるのにはどうしたらいいか？」  
や「中島に来てもらうにはどうしたらいいか？そのよう  
な方がいらっしゃるか？」という質問がありましたが、  
今、田中さんがおっしゃられたように一つ何かきっかけ  
があると人が人を呼ぶ現象があるかもしれないです。

伊東：やはり異分子がいないと文化は育たないのです。  
どのような場合でも、どのような時代でもです。です  
から田中さんのような人が来て歌を歌っていたり、バンド  
をやっていたりすることが、島の人は結構うれしいの  
ではないですか。

笠松：メタリカを聞きながら柑橘を収穫しているぞ、み  
たいなことがあった方がいいかもしれないです。私も非  
常に同感です。

川田さんへの質問ですが、ワインづくりのお話が結構  
ありまして「もうやめようと思ったことはないですか？」  
という質問や、「ビール醸造を始めた方がいらっしやい  
ますが、ビールとワイン、どちらを選んだらよいでしょ  
うか？」「ブドウの品種とワインボトルの値段との関係」  
「大三島には鷲ヶ頭山、大山祇神社がありますが、これ  
らを活用されることもいかがでしょうか。」などと、い  
ろいろ質問がきています。ワインの話と地域資源の活用  
の話です。

川田：分かりました。まずやめようと思ったかという質  
問ですが、何度も思いました。ブドウを植えて2年目の  
ブドウが収穫できる時期に、イノシシに食べられてしま  
い収穫できませんでした。去年は収穫の時期にスズメバ  
チが大量発生して、スズメバチにほとんど食べられてし  
まいました。また今年は、それほど被害はなかったの  
ですが、7月に豪雨があったり、9月に入ってから台風が  
たくさん来たり、本当に自分が予想している以上のトラ  
ブルがずっと続いて、もうこれは無理かと思ったことは  
何回もありました。けれどやっていることがすごく楽し  
いというよりも、誰かに言われてやっているわけでもな

いですし、自分がやりたくてやっていることですので、  
やめようと思っても同時にやり続けようと常に思ってい  
ます。

ビールとワインですが、これはもう是非両方とも飲ん  
でください。食前の1杯目にビールを飲んでいただいて、  
食中にワインを飲んでいただいたら両方を楽しめます。  
ビールも柑橘を使ったビールなど、大三島の個性がすぐ  
く出たビールです。ビールの後はワインで食事を召し上  
がっていただいたら満喫できると思います。

また、島でレモンチェッロ、レモンのリキュールも造っ  
ていますので、これはもうデザートに飲んでいただいて、  
ビールとワイン、レモンチェッロで大三島をぜひ満喫し  
てください。

笠松：なるほど。もうワインだけではなく、いろいろな  
ものが生産されたりしているのですね。

川田：そうです。いろいろなものがあります。もともと  
大山祇神社が、お酒の神様ということがありまして、境  
内に酒樽が奉納されているのです。

島内には造り酒屋が昔にはあったようなのですが、今  
はもう一軒もない状態です。折角お酒の神様が祭られて  
いるのに、そういった酒造りをされていないこともすご  
く寂しいと思っていましたので、ビールやワイン、レモ  
ンチェッロもできて、すごく活気づいたと思います。

笠松：先程の歴史を継承していく活動からすると、お酒  
は一つあるかもしれないですね。

川田：ブドウの種類は、私たちの農地では4種類栽培し  
ています。赤ワイン用の黒ブドウです。黒ブドウが2種  
類で「マスカット」・「ベリー A」という品種と、あと  
は皆さまざまワインで馴染み深い「メルロ」という品種  
です。白ワインは、これも馴染み深い「シャルドネ」とい  
う品種と、あとは「ヴィオニエ」という少し難しい名前  
の品種なのですが、こちらも4種類栽培しています。

笠松：ありがとうございます。続いて田中さんにイノシ  
シ関係の話です。「マネタイズする具体的なアイデアを  
聞きたい。」という質問です。



田中：アイデアをマネタイズされているのは、大三島のしまなみイノシシ活用隊なのですが、中島のイノシシのことで言いますと、中島の住人の大多数は柑橘農家なのです。そのため柑橘の害獣駆除としてイノシシを狩っている状態です。

中島にはイノシシ被害対策連絡協議会があり、私もそこに所属しているのですが、彼らの言葉をそのまま言いますと「われわれは柑橘農家だから、イノシシをお金にするつもりはない。」と言われる方もいらっしゃいます。そして、そのイノシシ協議会に私も何度となくアタックしているのですが、今のところ「ジビエの事業化をする気はない。」と代表者ならびに一部の役員さんたちに、押さえつけられている状態なのです。

こっそり反抗といえますか、フェイスブックでこれみよがしに、おいしそうな料理を作っては出して「なぜ、あなたたちはこれを売ろうとしないの？」ということを繰り返しています。

笠松：地場では、食べているのですよね。

田中：もちろんです。島内に消費用の解体所ができたのです。そこを島外の方が見ると「なぜこれだけの施設を造って、精肉の技術が上がっているのに売らないの。」と言われるのですが、「それはイノ協に言ってください」といつも言っています。

笠松：今は、食べたかったら来いということですね。島外に出していないのですね。

田中：そうです。

#### ◆地域資源を知ってもらうには？◆

笠松：ありがとうございます。荻原さんに幾つかお伺いしたいことがあります。まず、「大都市と地方でのCIの作り方で違いはありますか？」という質問と、また「他地域のブランドとどのように差別化を図るか？」という質問があります。

荻原：すごく時間がかかりそうな難しい質問ですが、某

信用金庫の事例で言いますと、一番初めに当時の理事長に「格好良くなくてもいい、あか抜けなくてもいい、ただ地元のおじいさん、おばあさんから子供まで受け入れられるものを。」と言われたのです。例えば東京でCIのプロジェクトをさせていただいた時の商圏の範囲は、東京を中心にして全国区だったりするのです。しかし某信用金庫の場合は、愛媛県の宇和島を中心とした南予圏域が直接のお客さまであるわけですから、それを超える必要はまったくないのです。

ただ某信用金庫は、ずっとその地域で生き続けなくてはならない使命があって、そのような持続可能な価値観や考え方、あるいは何年たっても地元の方々に受け入れられるデザインはどういうものかなど、そのようなことが重要かと思います。

一方で某農業生産法人は、最初から「都会に出していきけるデザインを。」との構想がありました。もちろん地元の方々にも受け入れられるけれど、単なるお土産や旅行者に向けた商品ではなくて、都会のデパートの陳列、ネット販売にも通用するような価格帯の商品で、デザインやコンセプト、またネーミング、コピーなどが重要でした。

やはりクライアントや場所によって違ってくると思っています。

笠松：「宇和島は、養殖業が日本で有数なのですが、ブランド魚のCI戦略が必要だと思いますか？」「漁業のCI戦略で何かアイデアはありますか？」との質問ですが、いかがでしょうか。

荻原：すぐにアイデアは分らないですが、愛媛県は今治のタオルブランドがすごく成功されている気がしています。

恐らくブランディング事業が始まった当時は中国や海外の生産に押されていて、業界としても非常に危機感があったと思います。一社一社が努力するだけではなく、業界全体として、地域ぐるみでブランド価値を上げていかないといけないという危機感の中で、あの今治タオルブランドが生まれたと思うのです。宇和島や愛媛県の内部地方は、柑橘や水産業、あるいは真珠やジャコ天などといった自然、地元の資源を生かした産業がたくさんあ

る中で、今は一社一社がそれぞれの努力でやっているところがあります。また、マークやネーミングを作るとか、努力をされているかと思うのですが、それが業界の活性につながっているかというところ、少し疑問なところがあります。やはりマークを作るにしても、デザインをするにしても、核となるコンセプトが重要で、持続可能なシステムや出口戦略とか、販路開拓といった一社ではできないことを業界全体として、本気になって取り組む意識がどこまであるかによって、魚や真珠にしてもブランディングは関わってくるのではないかと思います。

笠松：業界全体としてもすごく分かりやすい話です。個々に頑張るよりは、総力を結集するということも必要かと思うのです。

一方でこれは皆さまにお伺いしたいのですが、ある意味異なる役割を持つ人たちの協働によって進むこともあるのかと思うのです。例えば移住でしたら、呼び込む人、住む時に世話を焼く人、それから島で柑橘を栽培する人、販売する人などという異分野の連携といいますか、異なる力の合わせ技は何かないでしょうか。順番にいかがですか。異業種あるいは異分野の連携で何か進むようなことです。

荻原：東京に愛媛県出身者のさまざまなクリエイターの方々が集まって、交流をする機会として「クリエイティブの会」があります。

私は、愛媛県に関わる交流の機会は、東京でも結構参加している方だと思うのですが、非常に実があると感じているのがそのクリエイティブの会です。東京の縮小版や他の地域のまね事をしていくのではなくて、地域や組織、何か個性や創造的なことをやろうと思ったときに、クリエイターやデザイナー、アーティストなどといった文化人の方々の発想やアイデアは、すごく力になると感じています。例えば宇和島伊達400年祭の時には『海すずめ』という、全国公開した映画が作られたのですが、「クリエイティブの会」に参加していた愛媛県出身の大森監督との出会いから発展させていったということもありました。そういう場も東京にもあったのがよかったと思っています。

私自身は、なるべく地元に戻って自分だけが動くので

はなく、地元の方々や東京のいろいろな人脈も投入し、宇和島出身の故郷愛のある方々で手弁当でもやってくれるという思いの強い方々は、実はたくさんいらっしゃいますので、そのような方々を巻き込んで地元で還元していく流れを作れたらいいと思っています。

笠松：田中さんはいかがでしょう。

田中：私が思うのは、情報発信の大切さです。

情報の取扱い方一つで、プラスにもマイナスにもなることがたくさんあるではないですか。中島に行く時、まさにそれを感じて「もう、このように何も無い島に来てどうするの。」と皆に言われたのですが、住んでみると私の目から見るとすごく魅力的なものがたくさんあるのです。何気ない生活の中にこれは東京では絶対に味わうことができない味わいのある行為が隠れているのです。

それを掘り起こし地域資源として価値を見出す人が、まず必要ではないですか。けれどそれを感じたところで、私が今度それを人に伝えられなかったら伝わらないのです。人に伝わらない情報は無いのと同じことですから、このようにきちんとデザインをされて人に伝えていく立場の人が、今度は必要になってきます。

私は、柑橘でワインが造れないのかと思っているのですが、それは中島にブドウが無いからです。けれど無い所でもこのように作り出す人がいます。いろいろなタイプのプレーヤーが入ってくことで、組み合わせさって一つの流れやムーブメントになっていくのではないかと感じています。

私は、これは面白そうだなと思ったらやってみます。例えば最近ではイノシシの解体後、食べ切れないもので保存食を作ろうと塩漬けに加工しました。冷蔵庫へ入れておいたら生ハムのようなになったのですが、乾燥しすぎて固くなり、もうこれは駄目だと思ったものをフェイスブックにアップしました。そうしたら、隣の興居島の料理人さんがフェイスブックを閲覧され「それはいける」と言ってくれたので、試しに持っていったら、早速その場で「イペリコのハムも骨に近いところはこのような感じです。」などと言いながらサラダにしてくださったのです。それも一つのコラボではないですか。

私が失敗して廃棄だと思ったものをその人は価値を見

いだして、料理に仕上げてくれたという、コラボレーションなのです。そのためには移住者や島民にも、多様性が必要なのだと思います。

笠松：ありがとうございます。無いものをつくり出すということでブドウ果樹園を始めた、川田さんから見ていかがでしょうか。

川田：異分野との関わりということなのですが、この伊東さんのプロジェクト自体が、結構、異分野の方が関わられています。

伊東さんの伊東塾の塾生の方々は、建築以外にも、いろいろなバックグラウンドを持たれた方が関わられています。参道にあるみんなの家などは、そこに島内の方々が集まって何をするわけではないのですが、話が混ざり合って進んでいくといった形です。いろいろな人たちが、別に特にきちんとした目的もなく、緩くつながっている形でこの大三島のプロジェクトは進んでいると、大三島にいてすごく感じるのです。

先程のビールの話でもそうなのですが、同じお酒を造っていても決して競合ではないのです。むしろ協働していく人たちとして一緒に盛り上げていくということです。異分野の人たちが関わることで、いろいろな色が見えてきてそれが結果として外から見ると、盛り上がっているという形で見えるのではないかと思います。異分野との関わりは、地域活性の中ではすごく大切なことであると思います。

笠松：島のお2人に聞いてみたいです。逆に地域になじめなくて、いわゆる脱落した失敗したという形で、去って行った方はいらっしゃいますか。

川田：大三島では、何かしら地域に溶け込んでその地域で暮らしていますので、地域に溶け込めずに去ってしまった方は私の知る限りいません。

伊東：大三島へ地域おこし協力隊で来てくださった方は、誰一人、戻っていないそうです。他の島からも逆に移ってくると聞いています。

笠松：すごいです。大三島には何があるのでしょうか。

川田：具体的ではないですが、やはり大山祇神社があることは人を引き付けるそういった磁力があるのかと思います。

笠松：少しこれは探ってみたいテーマです。大三島に移住された方は、いろいろな業種の方がいますが、来られた方で建築家はいないのだと伺いました。異分野、異業種、多様性からしたら、そのあたりのところはいかがでしょう。それは、いろいろな方々がもう混じり合っている感じでしょうか。

川田：本当に混じり合っているわけではなく、その人たちが生活していく中でお互いに緩くつながって、それが混じり合っているという生き物的な感じ。かっちり分けられているわけでもなく、平行線に混ざり合っているわけでもなく、本当に緩い混ざり合いといったような混ざり方です。居心地のよさのような感じです。

#### ◆「クリエイター」としての働き方について◆

笠松：実はその感覚は大事かもしれないです。最後に一言ずつ4名の方にお伺いしたいのですが、非常に抽象的な話が幾つかあります。「影響をもらった人は誰ですか?」「無生物のDNAはありますか?」「一番困っていることや妨げになっていることはありますか?」「大事にしていることは何ですか?」とあるのですが、何かこれらで思うことを一言ずついただけたらと思います。

伊東：私は意識していなかったのですが、数年前にある人から「本にサインをください。」と言われたので「大きな夢を」と書いたのです。最近、その人がまたその本を持ってきて「また本にもう一つ書いてください。」と言われたので「いつまでも夢を」と書いたのです。やはりしつこいことは必要で、あきらめないことです。私だって50歳直前まで公共の仕事はなかったのです。住宅か、小住宅に輪をかけたぐらいの仕事でもう一生が終わるのではないかと考えていたら、突然、熊本県で公共の仕事のご依頼を受けて、それが始まりとなったのです。日本は実績をすごく重んじますので一つそういう実績ができ



ると、他の仕事に参加できるようになるのです。それまでやはり我慢するといいますか、そういうことがすごく必要だと今にしてみれば思います。

笠松：我慢することの裏返しは、しつこいことかもしれないです。ありがとうございました。川田さんはいかがでしょう。

川田：影響を受けた人ということで、2人程挙げさせていただきます。1人目は、私が大学生時代にワイナリーの研修でお世話になっていた、宮崎の都農ワイナリーの方です。

宮崎県は、皆さまもご存じのとおり台風の通り道で、年間の降水量が4,000ミリを超えるようなものすごく雨がたくさん降るところで、決してブドウには適した場所ではないのです。その当時は、なぜこのようなところにブドウを植えてワインを造っている人がいるのだろうと思って興味本位で行ってみたのです。本当にその地域で、おいしいワインを造りたいという思いを込めて不可能を可能にしたのです。一般常識で考えると、絶対に無理と思うようなことも情熱の思いでカバーをして、今では、世界でも認められるようなワインを造っているようなワイナリーの方なのです。大三島でワインを造ろうと思ったときに、周りで誰もやっていないからできないのではなくて、どこでもやろうと思えばできるというスタンスをすごく後押ししてくれた存在でした。

あと一人は伊東さんです。大三島に来たときに最初、伊東さんは「新しいライフスタイルを提案する。」と言われていたのです。私は、移住に当たってただブドウが作りたかったのが本心で、「ライフスタイル」と言われてもピンと来なかったのです。

けれどもこうやって大三島に実際に移住をし、生活をして地に足を付けて暮らしていく行為をすると、それまで都市で暮らしていた考え方の価値観ががらりと変わって、本当にそこで生きていく、また暮らしていくことに目が向くのです。

大三島に住んでみると、今までの生活の仕方がそうではなくていいと教えられたのです。そうかこれがライフスタイルなのだと。しかし、それは別に不便でもなく、全然辛くもないですし、むしろ都内で暮らしていた頃よ

り幸せだと思ったのです。そのようなライフスタイル、生き方を提唱してくれた伊東さんは、やはりすごいのだと改めて思いました。

伊東：見ていて一番感心したのは、「ブドウは10年かかる」と言われていて、すごく初期は大変だったと思うのですが、ワインが200本できたときに初めて彼女が「結婚してもいい。」と言ってくれたらしいのです。「それまで、3回ぐらい振られた。」と言っていましたから。やはり何かの夢を実現することは、人に感動を与えるということだったのではないかと。

川田：本当に土地が育ててくれた気がします。

笠松：田中さんはいかがでしょう。

田中：私が、今一番関心があるのは「人口減少社会に挑む」ということです。中島などは、本当に急激な人口減少でかつて10,000人もいたところが、今は2,500人です。まだ、ものすごいペースで人が減っています。これを現実的にどう乗り切るかです。私の漠然と思っているデッドラインは、1,000人なのですが1,000人までは今後20年程で恐らく落ち込むでしょう。

それをどう対応するかは、今、もうこれだけ移住だ、地域活性化だと騒がれる時代になってしまいましたので、どこの地域でも移住者を獲得するために躍起になっていますが、それだけでは不足なのです。というのも日本全体で人口が減ると言っているのに少ないパイを奪い合う状況では、皆が負けてしまうのです。

先程、伊東さんが言われていたとおり、建築の設計思想も時代に合わせて変えていくべきだと。それはわれわれ一人ひとりの生き方ももちろんそうですし、コミュニティーのありかたも時代に合わせて、本当はパラダイムをシフトしていかなければいけないのですが、未だにそういう議論がこういう場ぐらいでしか出ないのです。

実際の現場レベルでそういう議論をされる方がいらっしやらないのです。大学レベルや研究者レベルでは、もうそのダウンサイジングをどれぐらい緩やかに、どういふところにソフトランディングさせるのかの話は出るのですけれども、そこをもっと私は、一応、最前線に立つ

ている身として、この形ならいけそうだという打開策の  
目途ぐらいは、早く立てたいと思っています。

笠松：全く問題意識が同じです。ぜひ、また一緒に考え  
させてください。ありがとうございます。では荻原さん  
お願いします。

荻原：影響を与えられた人物というよりは、私自身はや  
はり愛媛県宇和島市に生まれたという誇りを、ずっと見  
失わないでいたいという思いが年々強くなってきていま  
す。私自身の実家も宇和島では非常に長く続く家です。  
一方で宇和島伊達家という、江戸時代から続く宇和島伊  
達藩、伊達家に嫁いだという歴史軸のある守るものが非  
常に多い家に嫁ぎました。そのような中で私自身が荻原  
姓を使い続けている理由にも通じるのですが、やはり守  
るべきものは守り、新しい挑戦はどんどん挑んでいかな  
いといけない中で、何が自分の支えになるかといいます  
と、故郷が好き、地元のこの部分は絶対守っていきたく  
いなどといった郷土愛であり、自分が生まれ育った家族に  
対する誇りのようなものが、今日を支えていると思って  
います。そのようなところはずっと大事にしていきたい  
と思っています。

いろいろなお仕事をさせていただく中にも、きっと関  
わる人々や土地に先程 DNA や遺伝子という言葉が出て  
きていましたけれど、そういった大切な思いや残したい  
ものは、そこに住んでいる人こそ知っているはずなので、  
そういったところと一緒に考えて、見つけてい  
けるような立場になっていきたいと思っています。

笠松：そうなのです。結局そこに住む人が、つないで  
きたものやつないでいくヒントを一番持っていると思うの  
です。私も地元学という形でやっていますが、それが見  
つけ方と活かし方につながっていくと信じて、今、動い  
ているところです。

本日のタイトルの「地域資源のを見つけ方と活かし方」  
は、見つける人は誰なのか、活かす人は誰なのかにもな  
るのかと思います。結局それは、外から来た人、外に出  
た方の目線で見た場合に住むことや、そこで生きること  
の中から見つけていくことも考えつつ、また、離れたか  
ら見えてくるものもあると思いますし、いろいろな立場

の方がコラボしていくことで、また見えてくることもあ  
ります。

やはり、これは手法がいろいろとあるのですが、視点  
は最初に伊東さんがおっしゃったような、人と自然の関  
係と、人と人の関係の回復という時代にありますので、  
そういう視点で、物事を見つめられるかどうかだと感じ  
ます。時代も変わって来つつあると感じて、その視点で、  
何かを見つけていきたいという形かと思います。答えは  
ありませんが、しつこく、あきらめないということが、  
今日は一番響きました。そういう形で取り組んでいきたく  
いと思っています。どうもありがとうございました。

【平成30年12月1日（土）13：30～16：30 於：愛  
媛大学南加記念ホール】



Profile 伊東 豊雄

1941年生まれ。65年東京大学工学部建築学科卒業。  
主な作品に「松山ITMビル」、「せんだいメディアテーク」、「TOD'S表参道ビル」、「多摩美術大学図書館（八王子）」、「今治市伊東豊雄建築ミュージアム」、「みんなの森 ぎふメディアコスモス」、「台中国家歌劇院」（台湾）など。  
日本建築学会賞、ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞、王立英国建築家協会（RIBA）ロイヤルゴールドメダル、プリツカー建築賞など受賞。  
2011年に私塾「伊東建築塾」を設立。これからのまちや建築のあり方を考える場として様々な活動を行っている。また、自身のミュージアムが建つ愛媛県今治市の大三島においては、塾生有志や地域の人々とともに継続的なまちづくりの活動に取り組んでいる。



Profile 荻原 実紀

株式会社コトヴィア代表取締役／感性デザイン経営コンサルタント。  
1978年宇和島出身。2001年立命館大学経済学部卒業。2003年同大学院経営学  
研究科修了後、日本のCI戦略の礎を築いたPAOSに就職。2010年COTOVIAを創業。  
「心に響く感動価値の創造 = Emotional Design」を創業理念に、企業のCI戦略・  
ブランド戦略・文化戦略等を専門とし、人や組織、社会の良き「在り方」「生き方」を志向  
する。2014年伊勢・日本文化に関わる商品を企画販売するSORAYUIを創業。宇和島伊達家13代当主 伊達宗信の妻としても宇和島の歴史保存や地域経済・文化の活性化と魅力化に取り組んでいる。



Profile 川田 佑輔

静岡県出身。  
ワイン好きが高じてレストランサービスの仕事に就き、ソムリエ資格を取得後。  
その後、ワイン醸造の世界に魅かれ、日本唯一のワイン専門機関であるワイン科学  
研究センターを持つ山梨大学へ進学。在学中には、ワインのコルク臭の原因と改善策に  
ついての研究や、非葡萄栽培適地における葡萄栽培について研究する傍ら、日本各地の  
ワイナリー研修に参加。2015年大三島に移住し、建築家・伊東豊雄氏が代表を務める株式会社大三島みんなのワイナリーを有志の協力のもと創立。現在は大三島みんなのワイナリーの栽培・醸造責任者として瀬戸内初のワイナリー設立を夢見て葡萄栽培を行う。ワインの美味しさや面白さを伝えるため日々活動中。日本ソムリエ協会認定ソムリエ。



Profile 田中 佑樹

愛媛生まれ。大学進学で上京。20代はフリーターをしながらバンドマン生活。  
雑誌編集の仕事を経て、松山市の離島・中島へ移住。  
現在は柑橘の栽培やイノシシ駆除などの活動をしている。



Profile 笠松 浩樹

愛媛大学社会共創学部地域資源マネジメント学科特任講師。  
1969年石川県山中町（現加賀市）生まれ。  
愛媛県松山市在住。1998年より島根県中山間地域研究センター研究員。2011年愛媛大学農学部農山漁村地域マネジメント特別コース助教。2016年より現職。専門は、資源の自給・循環（農山漁村における食料・エネルギーの生産と循環のしくみづくり）、地域コミュニティ（集落、自治組織、「小さな自治」などによる地域運営システムの構築）、条件不利地域の生活実態（「限界集落」問題と今後の集落および在住者のあり方、農林地の利用管理：農林地所有の実態と利用・管理のすりあわせ）、子育て支援（地域ぐるみの子育てを視野に入れた子どもや親などの居場所づくり）、U・I・Jターン（都市部から中山間地域等への移住に伴う課題や意識の把握）など、幅広く研究活動を行っている。